

その26 渚

(平成10年7月15日号—第196号)

「渚」とは、河・海・湖などにおいて、波が打ち寄せるところという意味です。

旧『枚方市史』にも、「渚は、淀川筋の港湾都市としての特色が見いだされ」と記されているように、古くから淀川を往来する船が出入りし、また文化の中継地として重要な位置を占めていたと考えられます。

さらに、渚といえば、文徳**[もんとく]**天皇の第1皇子、惟喬親王**[これたかしんのう]**が、交野遊獵に用いた別荘「渚院」**[なぎさのいん]**が有名です。例えば、9世紀後半の時代背景が描かれている『伊勢物語』には、惟喬親王が、在原業平**[ありわらのなりひら]**と狩獵をする話があります。それによれば、都から船で淀川を下ってきた親王の一行が、いったん水無瀬**[みなせ]**(島本町)の離宮に落ちついた後、淀川を下って渚院に入るくだりがあります。折から、周囲は桜が満開だったので、一行は狩りはそっちのけで、美しく咲き誇る花を見て、酒を酌み交わし、歌を詠んだのです。



44 旧渚院観音寺鐘楼(渚元町)

そこで、在原業平は「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」(春になると、桜の花はもう咲いたか、いつが見頃か、いやもう雨や風で散ってしまったかなどと大騒ぎするのが人の世の常であるが、いっその世の中に桜というものがなかったならば、お互いに春はもっとのんびりしていただけるのになあ)と、多分に逆説的な和歌をつかって桜の花を賛美したのです。

その後、別荘は荒廃し、明治の初めには廃寺^{*1}となり、本尊は少し北の西雲寺に移されました。ただ、今も渚院跡に残る観音寺の鐘楼と梵鐘だけは、市の文化財に指定されています。

あなたも、『伊勢物語』の舞台となった渚の地を散策し、遠い昔に思いをはせてみてはいかがでしょうか。

^{*1} 渚院跡に建っていた観音寺が廃寺となった。